



ARIMASS Letter

[Association for Risk Management System Studies]

危機管理システム研究学会 2001年9月

第6号

「またか」と「まさか」

危機管理システム研究学会常任理事

指田 朝久（東京海上リスクコンサルティング）

この原稿を書き出した時、残念なニュースが飛び込んできた。新宿歌舞伎町の雑居ビル火災で44人の死者が発生したというのである。ちょうど9月1日の防災の日でいつもなら「またか」の地震防災の記事が隅に追いやられ「まさか」の痛ましい記事で新聞は埋め尽くされた。この事件で普段の行動を振り返り背筋の寒い思いをした人も多かったと思われる。詳細な事故原因は今後の調査を待つとして、いつどんなリスクが我が身を襲ってくるか改めて認識させられた事件であった。

一方、これらの事件も喉元過ぎれば熱さ忘れるのとえのとおり、日が経つと忘れ去られてしまう。この日片隅に追いやられた地震もしかり。阪神淡路大震災直後あれほど熱心だった地震対策も今はマニュアルが読まれないまま放置されている企業が多いのが実態であろう。昨年世間を騒がせた食中毒事件もこの轍を踏まねば良いが。リスクへの対応を行うには、まずリスクに気付いてもらうことが必要であり、そのため繰り返しリスクの説明を行う。そのことが多くの人には「またか」になる。また、日本には作家の井沢元彦氏のいう言霊信仰が今もあり、言ったことが本当に起こると信じられているという。「飛行機が落ちたりして」と言って本当に事故が起こると「おまえが縁起でも無いこと言うからだ」と責められるのがそれで、そういえば何かしら心当たりがある人が多いであろう。これがリスクマネジメントの進展には問題となる。被害想定をし組織経営に大きな影響のあるシナリオを上司に提出すると縁起でもないと言われ伏せられてしまいかねないのである。

危機管理システム研究学会はシステムという組織での対応を研究する一つの柱があるが、組織を営むのはやはり人である。そこでこの人そのものの意識改革が重要な研究テーマになり得よう。「まさか」にならぬために「またか」をいかに克服するか、個人と組織の教育もまた当学会の重要な柱である。

最後に、火災で亡くなられた方のご冥福を心からお祈りいたします。

目	次
「またか」と「まさか」..... 1	分科会報告2・3
NYC テロ事件がもたらすもの・NYC レポート..... 2	事務局からのお知らせ..... 4

NYC テロ事件がもたらすもの・・・NYC レポート

鈴木 敏正 (日本総合研究所)

ニューヨークでの悲しい出来事の起こる前日に、ボストンからこの街に入った。
この日、午前中の打ち合わせの約束を、なぜか、午後に延ばしてもらっていた。
当日、ホテルを出るとき何気なく見たテレビの映像が信じられず、他の何チャンネルかを廻してみても初めて映画では無い事に気付いた。窓から見下ろす七番街通りを消防車、救急車、パトカーが、狂ったようにロウマンハッタンを目指して走り出し、それから72時間・・・3日間、通りからあのイエローキャブも消えた。そうして、今日で5日目、未だ、CNNの映像バックには、“Under Attack”の文字が消えていないが、他のテレビ局のバックタイトルには、“We shall overcome”が、しっかり刻まれ、“アメリカの正義と自由の戦い”が、一般社会でも始まっている。

起こるかも知れないことは、必ず起こる・・・と考えることのリアリティーの無さを、折に触れて、皮肉っぽく言われる日常だったが、この場に遭遇して、我々の想定を超えて何かが起こることなど、戯言でも何でもなく、“人間の意志、とりわけ悪意にとって不可能なことは無いこと”、また、“一旦、悪意が具現化すれば、それに抗する社会の対応策は、無いに等しいこと”を強く感じている。

神の意志・・・かとも思える自然災害のみならず、人間の悪意にも、思いを巡らせ、そこから起こる“悪魔のシナリオ”を断ち切る人類の叡智を結集した方策を考えていくことも、危機管理の現実的な役割になってきたのであろう。

分 科 会 報 告

【リスクマネジメント・システム研究分科会】

世話人：常任理事 指田 朝久（東京海上リスクコンサルティング）

- 1.開催日時 6月13日水曜日 18時30分から20時30分、日新火災海上保険本店会議室
 - 2.出席者（13名） 池内、北澤、小島、藪、吉川、長井、村上、福田、小澤、指田、竹中、多田、横井
- <第6回研究会報告>

前回第5回の研究会で宿題に出しました規格の3.3リスクマネジメント方針につき実際に各自作成した物を持ち寄り議論をしました。7名の案が持ち寄られ検討が加えられました。議論では、「ISO14001と比較すると3.3.3の目的と3.4.3の目標が区別されて認識されていない。」「定量化が困難なものがあるが定量化にこだわると先に進まない。」「1回目のサイクルと2回目以降のサイクルでは方針は異なって良いのではないが、1回目はどのリスクが対象になるか不明であるため定量化にはこだわらない。規格のなかでも方針の変更は最高経営者のレビューで出来る。」「いやいやそもそも方針は憲法みたいなもので社是社訓にリンクするものであり頻繁な変更は好ましくない。実務的にはリスクを特定してから方針を出している」「企業のリスクマネジメントの方針は簡単、つまり倒産しないことにつきる。」など多くの意見が出されました。規格を実際に適用するとなると相当難しいという意見が大半でした。その中で、「今は定量化が困難でも時代とともに出来るようになることもある。将来に向かって学会がその道しるべを果たすべきである」という力強い意見も出てそれにはみんな賛同でした。

次回は7月26日木曜日 新東京法律事務所で行います。

オピニオン

6月13日のRMシステム研究分科会に参加させて頂き、ありがとうございました。まず、実際に参加させていただいて感じたことは、分科会自体が全く堅苦しいところがなく、それでいて皆さん真剣に議論し合う雰囲気がとても良かったことです。これは、分科会の世話人であられる指田さんのお人柄によるところも大きいのではないかと考えております。

私自身は、原子力安全、防災、環境の分野を中心として、リスクシナリオの同定やリスクの定量化、IT等の領域での業務を行っていますが、先日の分科会ではリスクマネジメント方針という一つのテーマから、多様な業種の方々の様々な視点からのご意見を拝聴でき、非常に有意義な時間を過ごせたと感じております。次回(7月26日)を楽しみにしております。

会員 多田 浩之((株)富士総合研究所)

<第7回研究会報告>

1.開催日時：7月26日木曜日 18時30分から20時30分、新東京法律事務所

出席者(12名)：長井、中山、坂、樋口、竹中、吉川、指田、北澤、藪、松本、横井、福田(順不同)

今回の討議は「リスクの発見」と「リスクの特定」につき議論し、その後納涼会を実施しました。

討議ではリスクの発見とリスクの特定は両方合わせてRisk Identificationにあたるのではないかと。発見では発生頻度を考慮せずにすべて洗い出し記録する事が大切であり、1000個を超えるリスクが出てくることもしばしばであるが、特定のところで経営者の判断で詳細分析するリスクを絞りこんで良いと解釈するのではないかと。など活発な議論が交わされました。また言葉ではRisk Assessmentはどこにいったのだろうかなど疑問もだされました。皆、納涼会目当てではなくちゃんと研究してますよ。

次回は9月26日水曜日 18時30分から、場所は日新火災海上保険株式会社本店(お茶の水)です。

オピニオン

リスク発見、リスク特定、リスク算定、リスク評価・・・。似たような用語が並ぶ、リスクマネジメントシステムのための指針3.4.1.一体、このように用語を使い分ける必然性があるか根本的に疑問である。ある項目に「リスクを知覚する感性を向上させる。」とある。実は、これがリスクマネジメントの全てであり、後は必要ないのではないかとという気もする。

紀伊国屋書店では「リスク」の文庫本が大量に積んである。それだけ「リスク」に対する関心は高いが、それぞれが「リスクって何」という状態なのであろう。

会員 北沢 義博(弁護士)

当分科会で進めているJIS規格の意味確認も、ようやく「3.4 リスクマネジメントに関する計画策定」まで来ました。やや遅足かとは思いますが、その中身は極めて濃く、毎回活発な議論となっています。特に前々回は、ある企業をモデル企業と決め、リスクマネジメント方針はこの企業ではこうなるのではないかとという案を各メンバーが持ち寄り、議論しました。

私は、このように実際に「もの」をつくって議論するということは、自身の勉強になるだけでなく「もの」が分科会の成果として残り、とても価値にあることだと思います。これからも、積極的に取り入れてみてはいかがでしょうか。

実際に「もの」をつくり、議論を重ね、「ものs」として蓄積する。それが世の中に役立つものになれば、楽しいですね。

長井 健人(株式会社 日本総合研究所 研究事業本部)

【リスク情報交流分科会】

世話人：常任理事 鈴木 敏正(日本総合研究所)

<活動報告>

社会のリスク情報の定時・定点観測の一環として企業が自ら認識している企業リスクを調査・分析し、それらをデータベースとして整備することが、検討されています。

現在アリマスメーリングリスト上で調査計画が具体化しつつあります。

(調査・研究の目的・内容)

企業リスクが、どのように変遷していくかを定点観測すること。
これは、定期的に（ほぼ毎年）観測することにより、企業が、どのようにリスクを認識しているか、またそこでの認識に社会的共通性があるか、等を見ようとするものである。

（調査・研究の方法）

具体的には、各企業(当面、上場2000社程度)が出している年次報告書(annual report)の中の“我が社の事業展開において考慮すべきリスク”に示されているリスクを企業別に時系列化したデータベースとして蓄積し、業種別、規模別、地域別などの切り口でまとめることにより、分析していこうというもの

（これまでにメンバー間で出た意見、提案など）

- ・上場企業は2000社以上ありますのでしぼりこみと分担を行う必要がある
- ・データベース設計とその管理についてあらかじめよくご相談しておくこと
- ・「リスクについての社会の認識」についてのデータという観点からは新聞・雑誌の記事なども材料になり得る
- ・企業リスク自体の変化をウォッチすることも意義有りですし、その蓄積があれば、能動的なアプローチも出来るようになっていく
- ・毎年の観測結果を分科会としてまとめ、年次講演会で定期的に発表することも可能
- ・なぜ急に同様のリスクが、多業種で認識されたのか、反対に、なぜ、この時期にリスクとして重要視されなくなってきたか等、色々な分析が可能
- ・最近ほとんどの企業で設置するようになったIR担当に、定型フォームの質問状を分科会としてMailし、リスクに絞って答えてもらう、という方法も考えられる

事務局からのお知らせ

1.分科会連絡先

第1分科会（教育実践）：世話人：後藤和廣

第2分科会（RMS）：世話人：指田朝久

第3分科会(情報交流)：世話人：鈴木敏正

2.新入会員紹介

氏名	所属機関・職名
松本章	松本公認会計士事務所
安国 一	亜細亜大学教授

3.住所・所属等変更の連絡方法

会員各位の自宅のご住所・電話番号・所属機関の名称・所在・電話番号・職名等について変更の生じた場合には、変更前と変更後を並記のうえ、必ず文書にて事務局宛ご連絡ください。

発行 危機管理システム研究学会

〒221-0052 横浜市神奈川区栄町 1-19-403

. 045-440-6778 FAX. 045-440-6777

e-mail: arimass@muh.biglobe.ne.jp

<http://www5b.biglobe.ne.jp/~arimass/>

2001年9月22日発行

印刷 株式会社 櫻 栄 . 03-3288-5571